
願い

ネコミワコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願い

【Nコード】
N4362C

【作者名】
ネコミワコ

【あらすじ】
実加は母親のことを不幸で可哀相な人だと思ってきた。どうしたら母親は幸せになるんだろう。それはすごく難しいことのように思えた。壊れかけている家族を前に余命一ヶ月を告げられた母親。どうにかして母親を少しでも幸せにしたい。実加は母親の昔の恋人を訪ねる。

プロローグ

神さまは不公平だ。人は平等なんかじゃない。どんなに望んでも手に入れられないものがある。どんなにがんばっても変えられないことがある。それはほんとに些細なことなのに。

例えばみゆきは先週の土曜日、家族で中華料理を食べに行った。あみには2つ下の妹がいて、よくケンカもするけど仲がいい。祐二のお母さんは離婚したけど、自分の仕事を持っていて、いつも忙しくしてる。

大学生にもなって家族の話なんてお互いそんなに話そうとしないけど、時折出てくるその話題には他の話題とは違う生ぬるい温度がある。安心とか生活とか依存とか信頼とか幸せとか。

私はその手の話題がちょっと苦手、照れてるわけじゃない。怖いんだ。自分がなんでもないような顔でちゃんと聞き流せているか。うらやんだり、傷ついたりした顔をしてないか。たまには自分で笑い飛ばすこともある。「うちの親仲わるくってさー」。そうするとどうでもいいことのように感じられる。本当は夜中に一人で泣いたりするくせに。

家族の中では私は母親と一番仲がいい。自分勝手に外面がよくて、家族よりも体裁と自分の欲が大事な父親より、中学生の時から家族と会話をしなくなり、大学を卒業してからもちちゃんとした就職もせず、地元の友達からもおいていかれ、少しのことで切れるくせに、実家を出ようとしらない兄より、姑として母親にきつくあたりながら、年をとつたら体が動かなくなり、結局母親の介護を受けている祖母より。

母親は19のときに結婚した。高校を卒業してすぐお見合いをして、すぐに婚約したそうだ。父のことは特に気に入っていなかった

か、少し嫌いなタイプだったかもしれない、と私は思う。昔の結婚は経済的な事情が大いに関係していたらしい。ずっと母親のことを、可哀相だ、と思っていた。実際、母親は少し壊れかけていた。ちょっとしたことですぐヒステリーをおこして、父親とケンカした。会話もしない兄に対しては献身的にふるまい、いつでも食事ができるように準備し、食事をしないと何があつたんだろうと心配していた。私はいつも言った。「26歳でバイトもしてるんだから、それくらい自分でどうにかするでしょ。」

どうしたらこの人は幸せになれるんだろうと、小さな頃から私は考えていた気がする。母の日には必ずプレゼントをしたし、家の手伝いだって周りの同級生と比べたら、かなり積極的に行ってきた。家族旅行だって提案するのはいつも私だった。だけど母親の目から不幸の色は消えなかった。それどころか家族に対する憎しみさえ感じられた。

私の”幸せな母親”ごっこも中学3年の夏で終わった。些細なきっかけだった。

それはいつもの夫婦喧嘩だった。でも時間が夜中の1時を過ぎるころで、母親の甲高い声と父親の怒鳴り声は寝静まった近隣の家々にもきつと聞こえていたと思う。

私はベッドから抜け出して、二人がケンカしていた居間に降りて言った。

「うるさいんだけど、もう夜中なんだからやめてよ。はずかしい。」
二人の声に負けないくらい大きく、怒りをこめて。感情が高ぶって少し涙ぐんでいたと思う。

二人とも争いを中断して私をみていた。私はひどく悲しい気持ちだったから、冗談みたいに言った。少し鼻で笑いながら。

「なんで別れないの？離婚しちゃえばいいのに。」

何を期待して私はそんなことを言っただろう。へらへらと怖気づいて謝ってもらえるとおもっただろうか。

その後の母親の声を私はずっと忘れられない。その言葉こそ本心だ
と思った。

「あんたたちのせいで、別れられないんでしょう!!こんな家・・・

」

さすがに母親もはつとして口をつぐんだ。言ってしまったという後悔の表情が更に言葉に真実味を与えた。私は頭を殴られたみたいなしョックだった。もう終わりだ。と思った。

「ふざけるな。子供を言い訳にするんじゃないよ。」
涙があふれてきて、うまく言葉にならなかった。

私は自分の部屋までのすべての扉を力いっぱい閉めながら部屋に逃げ帰った。どうしようもない思いをぶつけるように。なんとなく気づいていたことが、形として現れてしまった。もうごっこは続けられない。そこまで馬鹿にはなれない。

少したつてから母親は私のベッドのそばにくると

「ごめんね。」

といった。私はそれを無視した。呼吸を整えることができなかったから、泣いていることはすぐ分かったと思う。でも壁に向かって横になり、布団をかぶり寝ているフリをした。私の髪に何かが触れて、母親が髪を撫でようとしているのを感じて、クビを動かして手を振り払った。母親はすぐ手を引っ込めて

「おやすみ。」

といって部屋を出て行った。静かな悲しい声だった。

次の朝、普通に起きて、学校に行った。母親も普通に起きて朝食の準備をしていた。言葉数は少なく、空気の重さを感じていたけど、それでも特に変わらない日常だった。次の日も、次の日も。あの日のことは誰も話さなくて、何もなかったように思えるくらいだった。父親も母親ももう忘れてしまったのかもしれない。私も母親と普通に話すようになった。ただあの日のことは忘れられないし、母の日のプレゼントを贈るのもやめた。

それでも私は母親と一番仲がいいし、まだ、どうしたらあの人は幸せになれるんだろう、と考える。どうしても叶えられない願い。どんなに望んでも、がんばっても手に入れないもの。

あの人の幸せ。

でも神様お願いします。もう時間がないんです。なんとかしてください。

どうしたらあの人を幸せにできますか？私になにができますか？

あの人の不幸な顔を思い出しながら、生きていくことは苦しいです。

あの人はあと一ヶ月で死んでしまうそうです。

第1話

やかましく鳴き続ける蝉の音、窓から差し込んでくる紫外線はさんさんとして痛いくらいだ。目覚めたとき、私は下着姿でベッドの上に転がっていた。頭で考えるよりはやく頭痛と胃の不快感が押し寄せてきて、昨日の飲み会のことを思い出す。大学が夏季休業に入る前のお祝いみたいな定例飲み会。学科の中で誰かが幹事やって、大体半分の20人くらいが集まって、実のない話をして騒ぐ。とにかく飲む。大人数の飲み会では、いつも私は調子に乗って飲みすぎしてしまう。昨日もビール、焼酎、日本酒と手を出して、お店をでてアパートにたどり着くまでの間、記憶が半分ない。

枕元の目覚まし時計を確認すると針は10時を回っていた。今日は午後から亜美とバーゲンに行く約束してるし、そろそろ起きて準備をしなきゃ。体を起こすと一瞬目が回るような頭痛がして、頭を抱えてそれをこらえる。シャワーよりもお湯につかってアルコールをとばした方がよさそうだな。あーものすごくのど渴いてる。苦しい。

そんなこと考えながら、昨日からバッグに入れっぱなしだった携帯をチエックした。

「はっ？なにこれ？」

思わずつぶやいた。着信件数8件の表示。心臓をぐわりとつかまれるように感じながら件名を一件ずつ確認した。

昨日の夜11時台に父の携帯から2件、朝7時から9時までの間、自宅から6件。

嫌な予感はどんどん確信に近づいてくる。ごくん。と咽喉がなった。自宅の電話番号が表示されている画面で通話ボタンを押すと、どんだん息が苦しくなる。コール音を聞きながら、この音がずっと

続いてくれればいいと思った。頭の中では世間を騒がした色んなユースのパターンが私の家のことに置き換えられていく。家庭内暴力とか殺傷とか自殺とか……。そういうことはいつだって起こりうることだと思ってる。パンパンに膨らんだ風船みたいに、不穏な空気が充満しているあの家は少しの刺激で粉々に破裂してしまうだろう。

電話にでたのは母でも父でも兄でもましてや祖母でもなかった。

「実加ちゃん？あーよかった。」

聞き覚えのある少し舌足らずの声は叔母の奈津子さんだった。奈津子さんは年の離れた母の妹で同じ市内にすんでいる。

「お義兄さんが何回かけてもつながらなくて。あーでもよかったわ。」

なんでこの電話から奈津子さんの声がきこえるんだろう？自宅の電話を母以外の人間がでることは滅多にない。なんとなく母に何かがあったんだ、ということが分かった。

「すみません。あの、電話気づかなくて……。それで、あの。何かあったんですか？」

「うん。もう今は大丈夫みたいなんだけどね……。お姉ちゃんが昨日の夜倒れて、救急車で市民病院に搬送されたのよ。もう治療もして普通にしてるんだけどね、しばらく検査入院っていうことみたいよ。」

「……入院。」

私は母のことを思い出してみる。父とケンカしているときの泣きそうな顔。祖母の介護をするときの無理につくったような笑顔。散らかった台所のテーブルに肘をつき、ちよつと疲れちゃったわ、と言ったときの遠くに向けられた視線。私は家を出るべきじゃなかったのかもしれない。母のそばにいななければいけないかもしれない。

「心配よねえ。今、お義兄さんが病院にいつてるわ。おばあちゃんのこととは私がみてるから大丈夫よ。それで実加ちゃん、もうすぐ大
学も休みでしょう？お姉ちゃんの入院の間こっちに帰ってくるこ
とができるかしら？お義兄さんもまだお盆休みに入らないし大変だ
と思うわ。」

「ええ。まあ。それは・・・どうにかなると思います。」

私は曖昧な返事をした。母のいない父と兄と祖母だけの家。それ
は私にとって最悪の環境だった。よかったわあ。という奈津子さん
の明るい声が聞こえる。

「すみません。色々ありがとうございます。とりあえず私は今日か
ら休みなんです、今日中に帰れると思います。」

電話を切ると、またやかましい蝉の音で部屋中いっぱいになった。
時刻は10時20分。

ついさつきまで寝ていたベッドに突っ伏すと、口に出さずにいら
れなかった。

「もうやだ。もうやだ。もうやだ。もうやだ。もうやだ。」

何度も繰り返す。母が倒れて入院なんて嫌だよ。あんな家に帰
りたくないよう。

そして、昨日の飲み会をひどく懐かしく思う。昨日のあの楽しか
った時間に母は倒れて苦しい思いをしてたんだ、と思う。ううん。
母はずっと苦しい思いをしていた。

「おかあさあん。」

小さな声でつぶやいてみる。私はあの人が好きなのか、嫌いな
のかわからない。でも、もしいなくなってしまうたら、置いていかな
いと思うと思う。

第2話

午後3時、昼間のローカル線はすいていた。線路の側には細い川が流れていて、奥には畑、田んぼ、たまに古い茶色の壁の家が2、3軒あつたりする。空には雲がほとんどなく、太陽の光がまぶしかった。

私は窓枠に肘をついて窓から見える風景が自分の実家に近づくのを坦々と見ていた。大学入学以来一人暮らしをしてるアパートの近くの駅から、実家の近くの駅までは電車を3回乗り換えて2時間かかる。誰とも話さず、ほとんど動かず、蠟人形のように固まったまま窓の外を眺めながら、頭の中ではいろんな思いがめぐっていた。

母は死ぬかも知れない、重い病気かもしれない、でもきつと意外と大丈夫だったりするんだろう。父や兄はどんな気持ちでいるんだろう。私はどう振舞えばいいんだろう。

窓を突き抜けてくる紫外線のせいで顔が痛かったけど、それはもうどうでもいいと思っていた。一定のリズムで線路上をいく車輪の音や子供のはしゃぐ声、それをたしなめる母親の声。そういうものは別の世界のことのように感じられた。私はただ平行に滑っていた。いやおうない力にひっぱられて。それはずつと苦手として、逃げたいと思い、避けていたブラックホールのような現実に飲み込まれていくような感覚だった。

駅の改札を降りると、タクシーを拾い、そのまま市民病院に向かった。暑い外の空気と冷房の効いたタクシーの中の空気はあまりにも差があつて、現実感を失った。たどり着いた白い建物は昔見たときより小さく薄汚れてみえた。受付で母の名前をいうと、看護婦さ

んが病室の場所を教えてくれた。消毒薬くさい、ひんやりとした廊下と階段。一度でも足を止めてしまったら、そこから動けなくなるような感じがして、自分を押し出すように前に進んだ。

「おう。ついたか。」

6人部屋の一番奥の窓際にある母のベッドの前に行くと、ベッドの横で小さな丸椅子に座って新聞を読んでいた父が、少し視線を上げ私を見た。前あったときの記憶より少し痩せて白髪も多くなったような気がした。無表情に安っぽい茶縁の老眼鏡をかけた顔はこの状況に戸惑っているような頼りない顔だった。

「おい。実加がきたぞ。」

母は肩より少し長いくらい髪の毛を無造作に束ねて、薄い水色のパジャマを着ていた。顔色は悪く、やつれた表情をしていたけど、私を見てにこつと笑い上半身を起こした。

「ごめんね。大学大丈夫？」

首のところの肉とか腕の筋肉とか前見たときよりすごく痩せてしまつて、皮だけがたるんでシワになっていた。一気に老けてしまった母の姿にびっくりしてしまつて、少しの間、私は何も言葉を発することができずただ呆然としてしまった。

第3話

入院や検査の色々な手続きを終えた父と二人で父の車に乗りについたのは、やっと日が沈み始めた午後6時を過ぎた頃だった。車の中ではあまり会話をしなかった。私が

「お母さんすごい痩せてたね。」

といい、父が

「そうだなあ。」

と答えた。

「いつからあんな痩せちゃったの？」

と聞くと

「ここ1、2ヶ月かなあ。」

と答えたので

「ふうん。」

といった。もともと父と会話をするのはあまり得意じゃないし、こういう状況でどんな話をするのか、検討がつかなかった。

玄関に入るととパタパタと音を立てて奈津子さんが居間から出てきた。

「おかえりなさい。わあ実加ちゃん、久しぶり。大人っぽくなっただわねえ。お義兄さん、おつかれさま。お姉ちゃんどうでした？」

奈津子さんはいつも元気がいい。天真爛漫という言葉がよく似合っている、とても母の妹とは思えないようなところがある。

奈津子さんはおばあちゃんとお茶を飲みながらテレビを見ていたようで、居間のテーブルには二人分の湯のみがあり夕方のニュースが流れていた。といってもおばあちゃんはソファベッドに横たわってテレビを見ているのか、寝ているのか判断できない。

「お久しぶりです。」

奈津子さんに向かって、少しにつこりと笑って挨拶し、

「ただいま。」

おばあちゃんに聞こえるように大きい声を出していった。おばあちゃんはおももぞと動き顔を私に向けた。おうともああとも聞こえるような返事をして

「実加か。」

といった。

「起きました？よかったね。実加ちゃん帰ってきましたよ。」

奈津子さんにニコニコされて、おばあちゃんもつられてニコっとした。奈津子さんは大きな声で歯切れよく、はっきり話す。職業的なものかも知れない。(奈津子さんは保母さんをしている。)私は奈津子さんのそういう話し方が少し苦手で気後れしてしまう。

奈津子さんは

「実加ちゃんきれいになったわね。お化粧もしちゃって、男の子からもてるでしょ?」
とか

「お姉ちゃんすごい痩せちゃってたでしょ?大丈夫かしらね。何も無いといいわね。」

とか一通り色んなことを話すと、

「ああもう帰って夕飯の支度しないと怒られちゃうわ。また連絡しますね。」

と行って、あつという間に3人の子供と旦那さんの待つ家に帰っていった。

「ありがとうございます。助かりました。」

玄関で奈津子さんを見送った後、家中がシンとしていた。

ニュースでは明日の天気の流れていた。

「明日も猛暑だって。」

「ああ。夕飯はどうする?出前でいいか。」

「うん。何でもいいけど。私電話しようか?お寿司?ピザとか?そ

ういえばおにいちゃんどうしたの？」

「あいつはバイトじゃないか？ たぶん。」

「ふうん。」

すべての言葉に意味がないような気がした。現実はずっしりとこの家に横たわっていて、そこに気持ちを縛り付けられていた。頭の中にはずっと、頬の肉が薄くなってしまった母の顔があった。それはたぶん私だけじゃなく、父も同じなのだと思う。

第4話

兄が帰ってきたのはその日の夜11時過ぎだった。家のすぐ隣の駐車場にマフラー音のうるさい車が一台止まると、ガラツと玄関の扉を引く音がした。あつ兄だ、と思うと体が硬くなった。

そのとき私はお風呂からあがった後で、居間にいて、濡れた髪をタオルでふきながら、なんとなくテレビを見ていた。好きでよく観るバラエティー番組は全然面白くなくて、その楽しい音と光は古い家の乱雑で薄暗い部屋には不釣り合いだった

兄の足音は玄関を上がると、居間には向かわず、居間とガラスの引き戸で仕切られた台所に入っていた。蛇口の水がコップに注がれる音がする。私は少しの間、兄の立てる物音を聞いていたけど、先に寝てしまった父から、正樹に伝えておけ、と言われた伝言を伝えるために、引き戸を少し開け台所を覗いた。ガソリンスタンドのロゴの入った作業服の背中が見えた。身長160センチ代中盤位の痩せていて小柄な兄の背中。数ヶ月伸ばしっぱなしといった感じのぼさぼさの髪にはキャップのアトがつつすらついていた。

「お帰り。」

この場合はただいまと言うのか、と私が考えながら声をかけると、兄はコップを流しにドンと置いて体半分だけ私の方を振り返った。約3ヶ月ぶりに帰ってきた妹が家にいるのに何の驚きもない、無表情、もしくは少し怒ったようなめんどくさそうな表情で。

「冷蔵庫にお寿司あるよ。あと明日はパンとかカップラーメンとかその戸棚に入ってるから自分で食べてね。」

壁際に二つ並んでいる食器戸棚の奥の方を指差しながら言った。

私も無表情になっていた。兄を前にするといつもどんな顔をしているのか分からなくなる。怒っていいのか、笑っていいのか。どちらにしろ返ってくるものはないんだから、感情をこめても自分だけバカみたいになるだろう。

「あと明日さくら苑のほうにお父さん連絡して、大丈夫だったら月曜日からはおばあちゃん預けられるって。2週間か3週間くらいだと思うけど。お母さんは1週間は検査入院だけどとりあえず安静が大事って感じて・・・。」

兄は冷蔵庫からお寿司の入ったお皿を持つと、うん、だか、うーだか分からない返事をして居間を通り抜け階段を昇って、自分の部屋のある2階に行ってしまった。はあー。私は大きいため息をついた。言葉を最後まで聞かない兄に少し腹が立ったものの、この空間に兄がいなくなったことにほっとしていた。どうせ最後のおばあちゃんの話と母の話は別に兄にしなくてもいい、と父から言われていた。

童顔の兄はさつきみみたいな顔をするるとほんとにすねた中学生か高校生みたいだ、と私は思う。でもここ10年くらいの間、あんな顔しか見たことない。兄が母とも父ともだんだん話さなくなつて、挨拶や簡単な返事すらしなくなつて10年とちよつとの間。小学校のときはあの童顔でよく笑つて、かわいいキャラとして女の子からもちよつと人気があつたみたいだった。私が1年生のとき五つ上の兄は6年生で、1年生の私の教室を数人のお姉さんたちが覗いていた、時には遊んでくれたりした。正樹君の妹の実加ちゃん。それが私の呼び名だった。小さいときは私たちは仲のよい兄妹で、兄は優しい兄だった。

兄と一緒に近くの田んぼにおたまじゃくしを捕まえに行つたとき、町内の駄菓子屋にお菓子を買いに行ったとき、兄は手をつないでくれたり、私の少し前まで走つていって、すぐ後ろを振り向いて私の

名前を呼んでくれた。

「実加！」

あのとときの兄の笑った顔を私はもう思い出せないでいる。でもその雰囲気だけは今よりずっと大人に見えていた。

第5話

「そう。よかったわね、おばあちゃん。いつもはなかなか急に預かってもらえないのよ。」

おばあちゃんがいつもデイサービスで通っている福祉施設のショートステイで預かってもらえることを知らせると、母は少し安心した顔で言った。入院生活3日目で一日中楽なパジャマでいることや小さな鉄パイプの白いベッドになじんで、すっかり入院患者として病院に溶け込んでしまった。

実家に戻ってから3日目の月曜日、トーストと目玉焼きと野菜ジュースの朝食を父と食べ、施設の人がおばあちゃんを迎えに来るのを待つてから、私は母の入院する市民病院に来た。新しいタオルや着替えを使用したものと交換するためのだ。

「なんか、おばあちゃんうれしそうにしてたよ。」

タオルや着替えをテレビの下の棚にしまいながら、今日の朝のことを思い出して言った。おばあちゃんはお迎えにきた施設の車に乗せてもらうと女性の介護士にしきりに何かを話していた。その様子はとても楽しそうで私のしっているおばあちゃんとは別人のようだった。以前母がおばあちゃんは施設に泊まるのが嫌いだといっていたので私は少し心配していたのだ。

「そう。出かけるのは好きみたいなのよ。でも夜になるといつも帰る、帰るって泣くみたいよ。今回は長いからね。大丈夫かしらね。」

特に心配した様子でもなく母がさらっと言ったので、私はおばあちゃんのことを少し可哀相と思った。それでなんとなく会話を変えた。

「使ったパジャマはどこ？うちもって帰らなきゃ。」

「いいわよ。自分でやるから。病院だつて洗濯機も乾燥機もあるのよ。」

棚の奥をこそごと探っていた手をとめ、ベッドの上で半身を起こしていた母に目をやると、母はやつれた顔でうつすらと笑った。「入院中はゆっくり休んでればいいじゃない。私が家で洗うつてば、」

語尾を強めにして私が言っても、

「本当にいいのよ。一日寝てるだけじゃ暇なんだから。」

母はそういつて表情を変えない。わたしがよく覚えてる母の顔。にっこりしてもどこか目が笑ってない、人を寄せ付けない冷たい笑顔。

私は苛立ちと寂しさを感じながら母の顔を見つめた。母は視線を泳がせるように白い天井を見て、クリーム色のカーテンを見て、光にあふれた窓の外を見た。母の病室の窓から見えるのは病院の駐車場で、おもちゃみたいに並べられたいろんな色の車たちが太陽の光を反射させていて、いかにも夏と言った感じの暑さを感じさせた。

「暑そうね。」

母は外の景色をまぶしそうに見つめる。まるで暑いことがうらやましいとでもいうように。

「暑くてしょうがないよ。家から病院に来るまでですごい汗かいたんだから。」

ちよつとだけ文句を言うように響いてしまった私の言葉に返事をせず、母は独り言のようにつぶやいた。

「こんなに暑そうなのに正樹は大丈夫かしら。」

まただ、と私は思う。また兄だ。病院に着替えを持って様子を見に来ている私の言葉は聞かないで、言葉を交わすこともしなくなつてしまった兄の心配をしてるんだ。この人は。

「正樹はちゃんとご飯たべてるの？あの子、こんなに暑いのにガソリンスタンドでなんて働いて倒れちゃわないかしらね？」

今度は独り言ではなく、ちゃんと私に向けての問いかけだった。

私は自分がどうしようもなく苛々してくるのを感じていた。

「倒れたのはお母さんでしょ？お兄ちゃんは今もう26なんだよ。自分のことくらい自分でできる歳でしょ？」

今まで何度も母にいったことがある言葉を母に言った。兄が夜中まで帰ってこなかったり、作っておいた食事をたべなかったりしたときに何度もいった言葉。でも母の耳にはいつも届かない言葉。

「でもねえ……。」

母は暑そうな窓の外の駐車場を見つめる。母がそこに見ているのは兄の姿なんだろう。でもそれは何歳いくつのときの兄なんだろう。それは中学生や小学生や今よりもっと幼い時の兄の姿のような気がする。兄は今もう26なのに。

家族の中でまだ兄のことを認めて、その存在を受け入れているのは私ではないかと思えてくる。そう思うと兄の息苦しさを、もっといえば生き苦しさを感^じじて胸が詰まる。

第6話

お米の形がなくなってしまうくらいどろどろに溶けたおかゆ、濃い黄色のポタージュスープ、ヨーグルト。それが今日の母の昼食だった。

「こんなのたべてるの・・・？」

私は啞然として言った。これじゃあほんとに重病の病人じゃない？

「今は胃がちよつと弱ってるから、固形物がうまく食べれないのよ。すぐよくなるわよ。」

母はリモコンを操作してベッドの腰から上の部分を起き上がらせながら言うと、テレビの下の台の引き出しを指さした。

「そこにお財布が入ってるからとってくれる？」

私が深緑の大きながま口財布を渡すと、母はそこから千円出して私に渡した。

「これでお昼食べてきなさい。おなかすいたでしょ？下に喫茶店もあるけど嫌だったら病院の近くに色々お店もあるから。」

年のせいなのか、病気のせいなのか、母の手は骨ばって乾いていた。

私は病院の一階まで降りて、喫茶店の前をふらふらしてみたけれど、なんとなく入る気にならず、陽射しの照る中、外の散策をする気にもならず、結局売店でおにぎりを二つとお茶を買って病室に戻ることにした。レジに向かう途中でふとお見舞いものコーナーみたくに果物やお菓子が並べられているところに桃がおかれているのを見つけた。あつ、もう桃でてるんだ、はやいなあ。と思って思わず手に取った。私のうちでは夏から秋にかけての時期に毎年、母の知り合いの農家の人から桃が送られてきていて、私も母も桃が大好きだったからいつもそれを楽しみにしていた。やわらかい桃の肌をなでて、甘いおいを嗅ぐと懐かしい気持ちがあった。旬の時期と比べ

ると二倍くらいの値段だったけど、おにぎりとお茶とあわせても千円いかない値段だったので、それをひとつ買うことにした。桃なら水分ばかりだから母もたべれるかもしれないなあ。と考えながら。

病室にもどると母はほとんど食事を終えていた。

「おにぎり買ったからここで食べるね。じゃーん。桃も買ったよ。」
桃をみせると、母の顔が少し明るくなった感じがした。

「あら、もうでてたの？はやいわねえ。」
「いいにおいね。」
「桃ならどう？食べれそうじゃない？胃にもやさしそうだしさ。」
「そうねえ。ちょっとたべてみようかな？」

何度も繰り返し桃のにおいを嗅ぎながら、母はにっこりしていった。

母が自分でやるというので、私はベッドの横におかれたパイプイスに座っておにぎりを食べながら、果物ナイフを器用に使いながら桃をきる母を見ていた。ナイフを入れるたびに桃のにおいは強くなって、私たちは何度も、いいにおいだねえ、といいあった。

私がおにぎりをふたつ食べ終わって、母も桃を切り終わると、ふたりで一切れずつ食べた。

一年ぶりに食べた桃はみずみずしくて、口の中に甘さが広がった。

「おいしいね。」

母もほんとおいしそうに、にこにこしていた。その桃が母が最後に口から摂取した固形の食べ物だった。

母はふた切れ目をくちにしたぐらいに急に顔をしかめて咳き込みだし、左手でくちを覆った。

「なに？どうしたの？苦しいの？」

パイプイスから立ち上がって、母の顔を覗き込んだが、母はどんな苦しそうになるばかりで、今度は右手で胃の辺りを押さえた。

「ちょっと待って。今、看護婦さんよぶから。」

必死でナースコールを探して、ボタンを押した。私はどうしていいかわからず、母の背中をさすっていた。母の咳は嗚咽に変わり、口を覆っていた左手の指の隙間から、赤いものが流れた。それは血液だった。

私は頭の中が真っ白になってしまい、叫ぶことすらできなかった。怖くて怖くて仕方なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4362c/>

願い

2010年10月13日14時21分発行